

初回保護室入院に立ち会った家族の心情

～家族との面接を通して～

山根千穂 武田久美子 藤原啓 山本朋恵 大井弥生 永末洋子
鳥取医療センター8 病棟看護師

*Correspondence: byoutou11@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

本研究の目的は、初回保護室入院に立ち会った患者家族が入院時を振り返り、保護室入室時に抱いた患者への心情、さらには保護室治療に伴う家族の気持ちを明らかにすることである。半構造化インタビューを用いて、保護室入院が初回である患者の家族 3 名を対象に調査を行った。類似するカテゴリーに分類分けした結果、17 の下位カテゴリーを抽出し、5 つの上位カテゴリーに統合された。その内容としては、[精神科入院に対する思い]、[家族の希望・要望]、[保護室を初めて見た印象]、[精神科治療に対する思い]、[制限に対する思い] が明らかとなった。これらは互いに密接に関わり合い、どのカテゴリーでも家族が抱く心情を踏まえた上での看護対応が必要になることが明らかとなった。鳥取臨床科学 7(2), 116-121, 2016

Key Words: 患者家族, 保護室入院, 半構造化インタビュー, 家族の心情, 精神科

I. はじめに

近年、精神科では早期の退院促進・入院期間の短縮を目標に、徐々に外来診療中心となって来ている。そのため、入院患者数は年々減少している一方で、患者層は急性期症状を呈した患者が増加傾向にある。そのため、殆どの精神科では激しい精神症状を有する入院患者のために、保護室という安全を考慮した個室を設けている。

保護室には様々な構造や環境があるが、A病院B病棟では、安全上の配慮から、基本的には物品を持ち込まない方針を取り、物品を入れる際は、全てにおいて主治医の許可が必要となっている。トイレも室内併設で、安全上、患者自身では流せないようになっている。窓も開閉できないアクリル板で、そこから外が見える様になっている。保護室入室に初めて立ち会った家

族は、病棟や病室に対し不安や驚き・戸惑い・安堵など様々な反応を示すが、それを口に出す家族は少数しかいない。入院時は患者対応が中心となっているため、家族の心情に看護師が介入しようとする働きかけは積極的には行っていない現状がある。過去の先行文献¹⁾では、保護室使用者の家族への満足度調査を行った研究があり、70%以上の家族が保護室への隔離に抵抗があり、また日常生活についての心配や、面会等の制限に対しても衝撃を受けたり、諦めの境地であるといった研究結果が出ていた。家族が保護室入院について何らかの思いを抱いているのに、その思いを看護師に話すことなく思いをため込んだままとなれば、患者への治療やケア提供の受け入れを含む有機的な家族—看護師関係には繋がらず、看護師、ひいては治療や病院全体への不信感へも繋がる可能性があると考え